研究発表（２）

アリストテレス解釈におけるハイデガーの良心概念について

横山　陸　（一橋大学大学院社会学研究科博士課程）

本発表の狙いは、マルティン・ハイデガーの未完の主著『存在と時間』（1927 年）における「良心」概念の原型を、1920 年代に彼が取り組んでいたアリストテレス解釈から解明することである。『存在と時間』は、この書の表題のとおり、存在の意味を時間から理解しようという試みであった。そのためのステップとして、この未完の書で実際にハイデガーが取り組んでいるのは、存在の意味を理解する人間の存在 ―「現存在」の「実存」― を、「根源的な」時間性として呈示することである。この時間性は、「死への先駆」において「良心を持とうと欲する」「決意性」という人間の「限界的な」在り方から明らかにされる。しかしハイデガーによれば、この「決意性」は、全く公共的な内容を持たない。そこには普遍的な道徳法則への意志も具体的な他者への共感もない。このように一見したところ『存在と時間』に示されるハイデガー哲学の没倫理性は、彼のナチズムへの関与というスキャンダルとともに、戦後ながらく、とりわけフランクフルト学派によって批判されてきた。

しかし他方では、1970 年代の J.リッターや M.リーデルを中心とした、いわゆる「実践哲学の復権」運動から、1980 年代にはハイデガー哲学を実践哲学として読み直す試みが生まれた。そのなかで注目されたのは、ハイデガーとアリストテレスの実践哲学との関係であった。また同時期には全集の一部として、『存在と時間』の執筆前後のハイデガーによるアリストテレス解釈が刊行されている。これらの著作において、ハイデガーはアリストテレスの実践知である「フロネーシス」の概念に注意を与えているが、こうした彼の洞察は、上に挙げたハイデガー哲学を実践哲学として読み直す試みのなかで、「理論知ソフィアに対する、実践知フロネーシスの優位」として定式化されたといえる。そしてまた、1920 年代にハイデガーのもとで学んでいたガダマーの回想によれば、当時ハイデガーはこの「フロネーシス」を、まさに「良心」として解釈していたという。

しかしながら、ふつうギリシア語で「良心」を表す語は「共通知」を意味する「シュネイデーシス」であり、しかもこの語は、古典ギリシア哲学においては重要視されていた形跡がない。また「良心」という語が、「良心の呵責」というような、今日の私たちにとって馴染みの意味を持つのは、「シュネイデーシス」が、キリスト教のなかでラテン語の「コンスキエンティア」に翻訳され、さらに大分経って、ようやく宗教改革期のルターにおいてである。

では、ハイデガーがアリストテレスの「フロネーシス」を「良心」と見なしたことの意図はどこにあったのだろうか。本発表は、これまでの先行研究を踏まえつつ、ハイデガーによるフロネーシス解釈の内実を、『存在と時間』における「良心」概念との連関において明らかにすることを試みたい。